

プロジェクト・ナビ・MU（ム） パラレル・I

もろびとこぞりて

北村
想

登場人物

女 1

女 2

これは静かな演劇である。

だから、初めから舞台は明るい。

女が二人して、朴としたテーブルを運んでくる。それを所定の位置に置くと、今度は椅子を向かい合わせにふたつ。次に微かな湯気に香る紅茶と、半分くらい水の入ったコップをふたつ。それから、今度は台本らしきものを手にして現れると、視線を交わすこともなく椅子に腰を下ろして、テーブルの上に、その台本を置いた。

互い、台本に眼をとおしはじめる。

女1「急に思いついたように顔をあげて」もろびとこざりてつて、何のことかしら。

女2「チョイナ。

女1「え？・・あなたいま何て言ったの。

女2「チョイナよ。

女1「何よ、それ。

女2「チョイナはチョイナでしょ。

女1「チョイナ？

女2「そう。チョイナよ。

女1「チョイナっていうのは、何なの。

女2「（顔をあげる）合の手でしょ。

女1「合の手？

女2「知らないの、合の手。

女1「知ってるわよ、合の手くらい。

女2「じゃあ、いいじゃない。

女1「よくはないわよ。私が聞いたのは、そんなことじゃないわよ。

女2 「じゃあ、何？

女1 「だから、何故、私の質問に対して、あなたがチョイナって言ったのか、その理由を聞いたのよ。

女2 「答えたじゃない。合の手だつて。

女1 「答えになつてない。

女2 「え、どうして？

女1 「チョイナが合の手だとしてよ、その、合の手のチョイナを、あなたが、何故、私の質問の次に、言葉にしたのが、知りたいのよ、私は。

女2 「あなたつて、理屈っぽい人？

女1 「理屈じゃないわよ。

女2 「じゃあ、何よ。

女1 「素朴な疑問よ。単純な質問よ。

女2 「ああ、そう。（顔をテーブルの上の台本にもどす）

女1 「で、何なの？

女2 「何が。

女1 「チョイナの意味。

女2 「あ（合の手と言おうとするが）

女1 「早口で、それを制して）合の手なんて言わないでね。

女2 「あなた、めぐまれない人？

女1 「え？

女2 「（意地悪く微笑むと）めぐまれない人に、愛の手よ。

女1 「（呼吸ひとつ、胸にしまいこんで）真面目に話してよね。

女2 「（笑つて）ごめん。

女1 「（表情がやや陰しい）

女2「(おっと、冗談が過ぎたかと察して) うーん・・・だから、ほら、よくあるじゃない。こういうダイアログの中で、『え』とか、それから、『ああ』とか、『うん』とか、いうでしょ。」

女1「言うわよ。」

女2「そういうのが多いでしょ、最近のお芝居って。」

女1「そうなの？」

女2「多いのよ。静かな演劇というのは、そうなの。」

女1「静かな演劇・・・ふーん、それで。」

女2「たとえば、ほら、もう一度、聞いてみて。」

女1「何を？」

女2「何でもいから。素朴な単純でも、疑問な質問でも。」

女1「(やや、呆れるが)・・・そう。じゃあ、聞くわよ。」

女2「どうぞ。」

女1「ねえ、もろびとこぞりてって何のこと。」

女2「え。」

女1「・・・(女2の顔をマジマジと見る)」

女2「(やや、あつて) ね、そうでしょ。」

女1「何がそうなのよ。」

女2「だから、いま、私、『え』って言ったじゃない。」

女1「言ったわよ。」

女2「同じことよ。」

女1「何が同じことなの。」

女2「一緒だっていうことよ、同じということは。(微笑む)」

女1「(しばらく女2の顔をジッと見つめているが、やにわにコップに残っていた水を女

2の顔に浴びせかける)

女2「(特に驚くようでもなく)何の真似?

女1「腹がたったの。

女2「何に。

女1「分らないけど、とつても、怒りを感じたの。

女2「あなたつて、そういうタイプ?

女1「そういうタイプつてどういこと。

女2「ヒステリーとか、よく起こすほうでしょ。

女1「普段はそんなことはないわ。

女2「いまのは?

女1「・・・まあ、そう言われれば、ヒステリーかも知れないけど。

女2「ヒステリーね。

女1「あなた平気なの?

女2「何が。

女1「私に水をかけられたのよ。

女2「平気よ。

女1「寛容なのね。

女2「私はヒステリーじゃないから。

女1「ヒステリーとかじゃなくて、常識の範疇でもよ。だって、私に水をかけられても、

顔によ、平気なんですよ。

女2「ほんとは、平気じゃないわよ。

女1「やつぱり。

女2「ちよつと、冷たかったわ。

女1「(しばし、女1を見つめ、またコップの水をかけようとするが、自分のコップには

水がないので、女2のコップの水を、女2に浴びせかける)

女2「慌てず騒がず、ハンケチをバッグから取り出し、顔を拭いながら」人の顔に水かけるの・・・癖なの？

女1「こんなこと癖でする人なんて、いるわけないじゃない。

女2「だって、同じこと、二回も。

女1「二度もつづけて焦燥をもよおしたのよ。

女2「焦燥をもよおすと、人の顔に水をかけるのが、あなたの癖なんだ。

女1「癖じゃない！

女2「じゃあ、何？

女1「当然の行為よ。

女2「ねえ、ひよつとすると。

女1「え？

女2「ひよつとするとよ。

女1「ひよつとすると何？

女2「ひよつとすると、(ふいに考え込む)

女1「(また苛立つてきた) ひよつとすると、何なのよ。

女2「ねえ(ひよつとすると) って、どういう意味かしら。

女1「(肩透かしくわされたが、瞬時に立て直して)もしかするって意味でしょ。

女2「そうよね。でも、その「もしかすると」が何故(ひよつとこ)になるのかしら。

女1「ひよつとこ？

女2「そうよ、ひよつとこよ。あなたって(ひよつとこ)なの？

女1「何を言ってるのよ、あなたはさつきから。(興奮するが、ここは堪えて、しかし)(ひよつとこ)」なんかになっていない！(と、大きく息を吸って、ゆっくり吐く)あなたが言ったのは、「ひよつと」でしょ。

女2 「ひょっとして、あなた、怒ってるの？」

女1 「(コップの水を見るがもう、水はない)

女2 「何か、私、あなたの気に障ること言った？」

女1 「(あれもこれも言おうとするが、思い止まると) だったら、答えてよ。

女2 「何を。」

女1 「チョイナよ。」

女2 「だから、それはもうさつき答えたじゃない。

女1 「(深呼吸してから) つまり、それは、こういうことなのかしら。

女2 「そういうことよ。」

女1 「まだ、言ってない！」

女2 「どういうことだと思ったの？」

女1 「・・・もういいわ。」

女2 「でしょ。」

女1 「でしょって？」

女2 「案外そういうことって多いのよ。」

女1 「そういうことが多いって？」

女2 「自分が深く悩んだり、怒ったりしていることでも、他人にしてみれば、何でもないことって多いのよ。」

女1 「(睨むが、諦めたようすで) そういうことじゃないけど、もういいわ。」

女2 「いいの？」

女1 「いい。」

女2 「あなたがいいのなら、私はいつこうにかまわないけど。」

女1 「私がほんとうに聞きたかったのは、違うのよ。」

女2 「え、違ったの？」

女1「私が聞きたかったのは、『もろびとこぞりて』よ。

女2「何、それ。

女1「『もろびとこぞりて』よ。

女2「それって、何かの暗唱番号？

女1「違うわよ。

女2「ID番号とか、パスワードとかいうやつ？

女1「まったく違う。

女2「歌のタイトル？

女1「（しばし女2の顔を睨む）

女2「ゴメンね。

女1「知ってたの？

女2「ちよつと、からかったのよ。

女1「あなた、意地悪なのね。イジメっ子よ。そうよ。性悪女よ。人參よ。

女2「（キョトンとして首をかしげ、瞳輝かせて）人參ってどういうこと？

女1「嫌いなものを言ってみただけよ。

女2「料理次第よ。煮るより炒めるのよ。そうしたら、

女1「人參の食べ方なんてどうでもいいわ。

女2「食べ方じゃなくて、料理の方法よ。

女1「同じじゃん。

女2「違う、違う。食べ方というのは、

女1「ちよつと待って。人參のことはいい。取り消すから。

女2「そう。で（女1の様子を見て）だから、歌のタイトルなんでしょ、それ。

女1「そうよ。

女2「そう。それは知ってたの。ユーモアよ。知らないふりしたのは。ユーモアよ。

女1「知らないふりがユーモアかどうかは、別にして、

女2「待って、私、でも、それ以上は深入りしたくないわ。

女1「深入りしないってどういうことよ。

女2「質問されても考えたくないってことよ。

女1「つまり、歌のタイトルだということは分かるけれど、タイトルの意味は分からないから、私にその質問はするなど、そう言いたいわけね。

女2「なんでえ、どうして、そんなに私のこころのことが分かるの。不思議だわ。

女1「(心の中はまたも震えている。焦燥で) もし、もしよ。もし、もし、

女2「亀よ、亀さんよってつづくの？その歌って。

女1「ちががああう。

女2「じゃあ、何が、もしなの。

女1「もし、ここから立ち去ってもいいのなら、私はいますぐにでもそうしたいわ。

女2「それは、

女1「出来ないから、やらないだけよ。(プイと横を向く)

女2「(御機嫌をとるかのよう)に) ねえねえ、なんだつけ。その『こざりともしろびて』の意味を考えようって、そういう提案をあなたはしているわけね。

女1「言ってるでしょ、それは。いっちゃん最初から、私はその質問だけをあなたにしたのよ。それをあなたが、チョイナなんていうもんだから、話がややこしくなったのよ。

女2「そうね。

女1「何が、そうねよ、まったく。

女2「こんなに大袈裟なことになるとは、思ってたんだもん。だって、たかがチョイナじゃない。

女1「(ふてている)

女2「でしょ。たかが、チョイナでしょ。たかがチョイナが、どうしてあなたを立腹させ、

この場から立ち去ろうとまで決意させるようなことになるかと、私に予想することが出来たのだろうか。ねえ、これ、省略表現の一つよ。聞いて、この後は「出来なかったに違いない」と、散文なら続くのよね。それを省略した表現なのよね。あのね、いま私がくどくど、そういうことを言うのは、出来るだけ、誤解のないように、顔に水をかける行為をヒステリーで私にあなたにさせまいとする配慮をもつて、話をややこしくしないために、理屈をいうわけではないんだけど、理屈の好きそうに私は考えているあなたにみえるあなたに、説明しようとしているのだけれど、ねえ、私の話していること、分かる？

女1 「分かるわけないでしょ。

女2 「でも、予想は出来なかったでしょ。

女1 「予想？

女2 「チョイナの予想。たかが、チョイナで、

女1 「分かった。もういい。

女2 「分かってもらえたかしら。

女1 「きつと、誰にもできなかったでしょうね。そんな予想は。（と、適当に）

女2 「たかがチョイナよ。よしんば、

女1 「いいわ。チョイナはもういい。もうそのラインでの話はお終い。

女2 「ハйнаとかでも。

女1 「ええ、チョイナがハйнаだろうと、アラヨだろうと、コラサだろうとよ。

女2 「たとえば、ニヨロボンでも？

女1 「（グツと堪えて）お、し、ま、い。

女2 「じゃあ、本題にもどりましょう。

女1 「あたりまえよ。私は、いつでも、その本題にもどるつもりよ。

女2 「で、『こぞりともろびて』の、

女1 「『こぞりともしろびて』じゃあないわよ。『もろびとこぞりて』よ。

女2 「ええ、その『もろびとこぞりて』の意味ね。

女1 「そう。

女2 「分かった。

女1 「分かったの？

女2 「あなたは私にこう言いたいんでしょ。『もろびとこぞりて』とはどういう意味なんだろう。・・・ね。

女1 「(呆れて黙して語らず)

女2 「ふんふん。なるほどね。(と、またテーブルの台本に視線をもどす)

女1 「で、どういう意味か、分かって？

女2 「チョイナ。

女1 「チヨイナはいい！

女2 「静かに、静かによ。冷静に冷静に。これは静かな演劇なのよ。

いや、これは不条理演劇かも知れない。

女1 「何でもいいけど、けつきよく分からないんでしょ、あなたには。

女2 「そうでもないわ。

女1 「分かるの。

女2 「考えるのよ。

女1 「考えて分かるものなの？

女2 「考えないと、何も分かりはしないわ。

女1 「そりゃまあ、そうだけどね。

女2 「考えましょう。

女1「ええ、いいわ。本題なんだから。チョイナの意味を考えるよりマシだわ。

女2「チョイナってのはね、

女1「(テーブルを蹴るような勢いで立ち上がる)

女2「ゴメン。ユーモアよ。

女1「ユーモアも一度でいい。

女2「だって、ほら、ユーモア っていうくらいだから、二回くらいは。

女1「本題!

女2「(コクコクと頷いて) ええ、本題ね。

女1「考えてよね。

女2「私が。

女1「だって、考えましようっていったのは、あなたよ。

女2「そうね。よく憶えていたわね。(微笑む。ペット対してそうするかのように)

女1「たった30秒前に言われたことを忘れる人なんているもんですか!

女2「(コケットに首を横にふる) うううん。それが、いるのよ。

女1「うそ。

女2「いるの。あのね、私の友達なんだけど、このあいだ、稽古が終わってから、私、

新宿に映画を見にいくと思って、急いでたのよ。そしたら、その友達が私に聞いたの。ねえ、急いで何処か、行くのって。私、新宿に映画見に行くのって答えたのよ。

そしたら、その友達が、こういうの。へーえ、映画か。で、何処へ行くのって。それで、新宿よって、言ったら、ああ、新宿か。新宿なら、地下鉄ですぐじゃない。新宿

まで何しに行くの?て聞くのよ。

女1「それは、ただの馬鹿。

女2「そうよね。

女1「本題。

女2 「はい、本題ね。

女1 「考えた？

女2 「そんなすぐには、考えられないわよ。

女1 「といつて、10分も20分も時間がないのよ。

女2 「急いでるのね。

女1 「ゆつくりはしていないわ。

女2 「えーと、まず、考え方のコツというのがあるのよ。

女1 「コツ？

女2 「そう。思考法っていうのかしら。

女1 「思考法。へーえ、どんなの、それって。

女2 「『考えるヒント・思考の方法』っていう本を読んだの。

女1 「ふーん。

女2 「どうしてそんな本を読んだかというよね。

女1 「いい。その理由はいい。

女2 「興味ないの。

女1 「なくはないけど、いまそれをあなたに喋らせると、また本題が遠のいてしまいそうだから。

女2 「そうかな。

女1 「そう。そういうふうに横道に逸れだしたら、逸れて逸れて、ずっと逸れて、互いの

出生の秘密まで語らなければならなくなりそう。

女2 「あなた、出生に秘密があるの？

女1 「ないわよ。た、と、え。譬えて言ったの。

女2 「あるんじゃないの？

女1 「あのさ、お願いだから、本題にもどつてくれる。

女2 「分かったわ。えつとね、私の出生の秘密というのはね。

女1 「それは本題じゃないでしょ。

女2 「ああ、そうよね。えーと、ああ、そうそう、でね、思考法なんだけれど、難しい問題にぶつかったときは、それ全部をいっぺんに考えるのではなくて、分けて考えるといいと、その本にはあつたわ。分析というのは、分けて考えることだと書かれてあつたわ。

女1 「理にかなってるとはじゃない。

女2 「だから、分けて考えましょ。

女1 「いいけど、何をどう分けるの？

女2 「『もろびとこざりて』でしょ。

女1 「ええ。

女2 「じゃあ、まず、『も』ね。

女1 「え？

女2 「『も』よ。

女1 「何だつて？

女2 「『もろびとこざりて』を分けて考えたら、まず『も』でしょ。

女1 「そういうのを、分析っていうわけ？

女2 「じゃ、ないかしら。

女1 「違うような気がするけど。

女2 「やってみましょよ。

女1 「やれるもんなら。

女2 「『も』か。『も』・・・さあ、『も』って何かなあ。・・・何だと思う。

女1 「思えるわけじゃないでしょ。そんな、『も』だけで。

女2 「そうよね。

女1「細かく分けすぎじゃないの。

女2「そうかもね。ねえ、せめて『もろ』までにしない？

女1「いいわよ、『もろ』でも。

女2「『もろ』なら何とかなりそうね。

女1「なるもんならね。

女2「自棄になったら、駄目よ。地道な努力が大切なのよ。

女1「はいはい。

女2「『もろ』・モロね。モロって、ほらちよつとグロテスクよね。

女1「グロテスク？

女2「モロに出すとか。モロに見えるとか。モロにやるとか。あれっていったい語源は何かしら。

女1「知らないわよ。

女2「きつと、エッチなものよ。

女1「エッチなもの？

女2「そうよ、エロと一緒に。モロとエロ、似てるでしょ。

女1「まあね。

女2「あなた、モロにエロなの見たことある？

女1「モロにエロなのって？

女2「(何を思い出したのか、両手で赤くなった顔をかくす)

女1「エロから離れたほうがいいんじゃない。

女2「だって最近のことなんだもん。

女1「最近でも戦前の話でも、ともかくエロから離れてくれる。

女2「分かった。努力する。

女1「で『もろ』は何なの？

女2 「また、思い出したモロエロがあるらしくて、両手で顔を覆う」

女1 「テーブルを叩いた」

女2 「ごめん。(しばし考えるが)・・・『もろび』までいきましようか。

女1 「いいけど、別に。」

女2 「『もろびと』までいったほうがいいかしら。

女1 「そうね。その調子で、『もろびとこぞりて』までいくといいわ。

女2 「自棄になっちゃ駄目よ。

女1 「自棄じゃないわよ。当然の帰結を予想しただけよ。

女2 「『ころびともぞりて』なら簡単なんだけどね。

女1 「(ちよつと驚き) ナンデ？

女2 「何かが転ぶわけでしょ。『転び、と、もぞりて』だから。

女1 「転ぶのはいいとして『もぞりて』って何なの？

女2 「手よ。『もぞり手』よ。

女1 「手。

女2 「そう。手かもぞるようになってるわけ。

女1 「(こ馬鹿にして) なるほど。転ぶと、手かもぞったっていうことね。

女2 「そうよ。

女1 「それでよく分かったわ。

女2 「でしょ。(嬉しそう)

女1 「あなたが、私の聞いたことに対して、どれだけ真面目に考えていないか、あるいは、あなたという人は、ものすごいトンチキか、大馬鹿やろうのコンコンチキか、ただの
アホか、あるいは、私をからかって喜んでるだけの、イジメ大魔王だとうことがよく
分かったわ。

女1、言うだけいうと、鼻息を少々あらげたまま、台本らしきものに視線を移す。
ややあつて。

女2「あのさ、

女1「チョイナ。

女2「あら、

女1「さっきの仕返し。

女2「あのさ、

女1「何？

女2「質問していい？

女1「いいわよ。

女2「あなた、『もろびとこぞりて』ってどういうことかしらって、私に聞いたんでしょ。
そうよね。

女1「そうよ。

女2「何で？

女1「チョイナ。

女2「(気にせず)どうしてそんな質問、つまり、どうしてそんなこと、私に訊ねたの。女1「それは、それは、うまく言えないけど、ふいに、ふと、気になったのよ。

女2「ふーん。

女1「意味分かんないで歌ってたことに気がついたから。

女2「歌えるの、その歌。

女1「まあね。

女2「じゃあ、話は早いんじゃない。

女1「話を早くする方法なんて、あなたに聞きたくはないけど、どうしたら、話が早くな

るって？

女2 「歌ってみてよ。

女1 「歌うの？

女2 「そう。

女1 「私が。

女2 「そうよ。

女1 「ここで。

女2 「歌ってみてよ、お願い。

女1 「そう。(ウン、オホン、アーアー) 歌うわよ。(構える)

女2 「伴奏要る？

女1 「(ズッコケて) 要らないから、黙ってて。

女2 「はいはい。

女1 「(歌う) もろろびとこぞりりてゝ むかゝえゝまゝつれゝ ひさゝしゝく まち
ゝにゝしゝ しゅわつきませゝりゝ しゅわつきませゝりゝ しゅわあゝしゅわああ

あ きゝまゝせゝりゝ・・・以上。

女2 「(拍手)

女1 「やめてよ。

女2 「いいじゃない。上手よ。

女1 「歌の善し悪しを考えてんじゃないのよ。

女2 「そうね。

女1 「で、どうなの。話は早くなりそうなの？

女2 「ポイントは「しゅわつきませゝりゝ」ってところね。

女1 「・・・どうして。

女2 「だって、そこんところ、何度も出てくるでしょ。

女1「(歌詞をソラで思い出し) ああ、そうね。(納得)

女2「(しゅわつきませりり) か。これは、あれね、お湯がシュウシュウいつて沸いて
きているってことよね。

女1「お湯があ？

女2「(そのように歌ってみる) シュウ沸きませりりシュウ沸きませりり。

女1「お湯があ？

女2「そうよ、アチチチチつて。

女1「それは違うと思う。

女2「じゃあ、何？

女1「炭酸とか、レモンとか、口にいった感じじゃない。こう、シュワシュワつてくる感
じよ。(そんなふうに歌う) シュワツきませりりシュワツきませりり。

女2「それ安いビールまがいのお酒の宣伝みたい。

女1「まあね。

女2「その歌、二番はないの？

女1「あるんじゃないの。

女2「あるわよね。

女1「私、歌詞知らないわよ。

女2「そうか。じゃあ、駄目ね。

女1「でも、ねえ、いまの一番の歌詞の中に「ひさしくまちにし」ってあったでしょ。

女2「あつそうか。(ポンと手を打つ)

女1「え、分かったの。

女2「ひさし君が町の西にいてることよね。

女1「ち、が、うんじゃないの。

女2「じゃあ、

女1「(女2を制して)言わなくていいわ。

女2「あのさ、

女1「いい。もういい。

女2「そうかなあ。

ややあつて

女1「(ひさしくまちにし)」というのは、久しくだから、ずいぶんの時間、誰かを待つてんのよ。きつと。

女2「私たちみたいに？

女1「そう。

女2「いま何時？

女1「時計忘れてきちゃったから。でも、もうずいぶん待つてるんじゃない？ 私たち。

女2「そうね。二日くらい。

女1「二日？！

女2「二日くらい待つたような気がするってこと。

女1「何で、三日でなくて二日なのかよく分かんないけど、聞かないことにするわ。

女2「三日なら坊主でしょ。だから、二日よ。

女1「聞かなくて良かった。

女2「でも、ちよつと、待たせすぎなんじゃない。

女1「時間はキチンと守る人だつて聞いたんだけど。

女2「そうなの。

女1「有名な話よ。

女2「へーえ、知らなかった。

女1「お腹がへってなくっても、お昼は12時になると食事に行くんだって。

二人、笑う。

女1「時計をね、腕時計なんだけどさ、いつも3分進めておくんだって。何でだと思う？

女2「さあ、約束の時間に遅れないようにかな。

女1「違うの。世界より3分、早く生きているんだって。

女2「私、違う噂聞いたことあるわ。

女1「時間のこと？

女2「メモよ。

女1「メモ？

女2「あの人がモチナイ理由。

女1「それがメモなの？

女2「そうよ。

女1「何よ、メモって。

女2「デートとか、するでしょ。

女1「ふんふん。

女2「こうやってお茶飲んだり、食事したりしているとするでしょ。

女1「うんうん。

女2「女のほうが、楽しそうにお喋りなんかしたりしているとするじゃない。

女1「ほいほい。

女2「女の話聞いてるのかと思ったら、

女1・2「チョイナ。

女2「突然、深刻そうな顔になって、ポケットからメモ帳を出して、一心不乱に何か書く

んだって。それで、書き終えて、メモをポケットに片づけて、女の人にこう言うのよ。

女1「えーと、何の話でしたっけ。でしょ。」

女2「そう。」

二人、笑う。

女2「もつと有名な話があるわ。」

女1「あれじゃない。お見舞いでしょ。」

女2「お見舞いじゃなくって、お見合いよ。」

女1「え？私はお見舞いのことで聞いたけど。」

女2「私が聞いたのは、お見合いの席で、突然「あっそうか！」って大声出して、それからひとりで笑い出して、「なあんだ、その手があつたんだ」って言って、それから周囲を見回して、お見合いの相手の女性に、「えーと、ここは何処でしたっけ」って聞いたって話よ。」

女1「私が友達に聞いたのは、ずいぶんと具合の悪い知り合いを病院に見舞いに行つて、その人のベッドの傍で、いい、いまにも死にそうなその人が何か、言ってるのによ、突然「あっそうか！」って大声出して、それから、「殺してしまえば簡単なんだ」って言うてよ、「死ね死ね死ねだ。死んでもらおう」ワッハッハよ。」

女2「へーえ、いろいろあるのね。あの子、さっきのモテナイ話にもどすとき、オセロでもトランプでも囲碁でも何でもいいんだけど、彼とやるとちつとも面白くないんだって。女1「え、どうして？」

女2「ふたりにゲームをしているって気がしないんだって。ふんふん、とか、ほうほうとかへーえとかいって、独り言が多くて、彼だけが楽しんでるみたいでイヤだって。」

女1「まあ、淋しい老後をおくればいいわさ。」

女2 「そうよね。

女1 「淋しい老後にモテナイのはいいけど、時間に遅れるのはね。

女2 「何時の約束だったわけ。

女1 「え？

女2 「約束の時間よ。

女1 「あなた聞いてないの？

女2 「あなた、聞いたんでしょ。

女1 「聞いてないわよ。

女2 「イヤダあ。

女1 「だって、あなた、誘ったんでしょ、私を。

女2 「そうだけど、あなた、知らなかったの？

女1 「あなたが知ってると思ってたんだもの。

女2 「私、あなた、聞いてるとばかり思ってた。

女1 「場所はここよね。

女2 「だって、あなたここだって、

女1 「言ってないわよ私。

女2 「じゃあ、何でここに来たのよ。

女1 「いつもここだから、ここかなと思って。だって、あなた私がこのお店の名前、

女2 「それは、あなたが、そう言ったから、私もそうだと思ったからよ。

女1 「そんないい加減なこと言わないでよ。

女2 「だって、そうなんだから。

女1 「いったいどういう約束したの？

女2 「誰と。

女1 「彼とよ。

女2「約束って？」

女1「会う約束した時に、何処でとか、その場所とか時間とか。」

女2「寝惚けてるの、あなた。」

女1「寝惚けてるって？」

女2「約束したのは、あなたでしょ。」

女1「(コップを見るが)」

女2「お水はもう無いわ。」

女1「じゃあ、じゃあ、私たち、何してるの？」

女2「何してるって、待ってるんじゃない、彼を。」

女1「あのさ、そういう、不条理劇の、その、えっと、あれ、なんだっけ。」

女2「『ゴドー』？」

女1「そう、それよ。ここをそういう世界にしないでくれる。」

女2「するなっただって、私のせいじゃないもの。」

女1「つまり、つまりよ、私たちはその、来るアテのない彼を、あんなに無駄な話をしながら待ってたの？ いままで。」

女2「無駄な話だったかどうかは、分からないわよ。」

女1「少なくとも、あなたの喋った分はそうよ。」

女2「それに、彼が来るアテがないかどうかは、まだ分からないことよ。」

女1「いまの時点ではそうだよ。」

しかし、これは教養演劇なのある。

少々の間があって

女1「ねえ、ほんとに「もろびとこぞりて」って、どういう意味なのか、真面目に考えて

みない？

女2 「いいわよ。

女1 「私はね、こう思うのよ。「もろびと」って、ワープロで打鍵しても、漢字変換しないでしょ。

女2 「あら、そうなの。

女1 「少なくとも、私の使っているのではそう。でも、私はこれは、諸々の人のことだと思うの。

女2 「そうよ、きつと。

女1 「でしょ。で、「こぞりて」なんだけど、これも漢字変換しないの。

女2 「「こぞりて」はちよつとね。

女1 「でも、辞書で調べるって方法があるのよね。

女2 「あつそうか。

女1 「でしょ。こういうことを、おろそかにすると、駄目なのよ。あなた、おろそかって漢字で書ける？

女2 「「おろそか」・・・それ、言われたことあるわ、つきあってる彼に。

女1 「恋人に？

女2 「そう。

女1 「出来ちゃった時？

女2 「そう。でも、そういう意味じゃないでしょ。

女1 「違う。おろそかっていうのは、疎ましいと同じ字で疎かって書くの。疎遠の疎よ、疎外の疎。（書いてみる）ほら、こうよ。

女2 「へーえ、そうなの。どういう意味なんだろう。

女1 「それを辞書で引くとね、

女2 「何でも辞書ね。

女1「「おろ」っていうのは、大雑把なことなんだって。

女2「へーえ。「おろ」と「そか」に分けるんだ。さっきの、思考法みたい。

女1「で、疎かというのはね、大雑把に扱うことよ。つまり、なおざり、いい加減なことをいうのよ。

女2「そうなんだ。ふーん。辞書って便利ね。

女1「で、「こぞりて」を調べるとね「挙って」ということなのよ。挙ってというのは、こういう字よ。

女2「ふんふん、一挙両得の挙ね。手をあげる挙手の挙ね。

女1「「こぞりて」が音便変化すると、「挙って」になるわけ。分かるわよね、音便変化って。

女2「穏やかに変化するんですよ。

女1「ち、が、う。その穏便じゃなくて、音よ、促音、あのね、小さな「っ」に変化するヤツ。つまる音。「さっき」とか「もつぱら」とかの「っ」

女2「で、どういう意味？

女1「だから、「残らず」とか「ことごとく」とかいう意味。みんなってことでしょ。

女2「すると「もろびとこぞりて」というのは、諸々の人々がみんな一緒にって、そういう意味なのね。

女1「そうよ。

女2「なんだ、意味なんて、分かっくんじやないの。

女1「試してみたのよ、あなたを。

女2「試したって？

女1「タイトルの意味が分かって、これ、やってんのかどうか。

女2「あのさ、私ってバカの役？

女1「そうじゃないと思うけど。ほら、たった二人だと、どうしても、漫才のボケとツッコミに分かれるわけじゃない。

女2「私、ボケなの？」

女1「そうとは、言つてないけど。」

女2「言つてるみたいだけど。」

女1「これは漫才じゃないから、そうとは限らないと言つてるじゃない。」

女2「あなた、じゃあ、タイトルの意味、分かるの？」

女1「それは、いま、説明したじゃない。」

女2「それは言葉の意味でしょ。私が聞いているのは、タイトルの言わんとするところの意味よ。」

女1「イワンとするところは、・・・あのさ、『イワンの馬鹿』って童話つて、どういう話だったつけ。」

女2「あなたが、ボケかましてどうすんのよ。」

女1「だから、その、

女2「ほら、ごらんさい。誰がバカで誰がボケよ。こつちがツツコンデいったら、あなただつて、ボケるしか出来ないじゃない。」

女1「じゃあ、言つてよ。タイトルの意味。」

女2「知らないわよ。何かの命題じゃないの。」

女1「ドキつとすること言うのね。」

女2「えつ、ドキつとすることつて何？あなたが寝る時に毛糸のパンツはくことを、私がバラしたとでも言うの。」

女1「別に、そういうことでも、あなたが、普段は胸に二枚もパットを入れている秘密を私が洩らしたということでもないわ。」

女1、2 暫し見合っているが。

女2「何？ドキッて。

女1「あなたが、『命題』なんて難しい言葉を使ったからよ。

女2「ぼろつと口に出ただけよ。ふつう、教養つてのはそんなものでしょ。

女1「あつそう。ふーん。『もろびとこぞりて』って命題なのかしら。

女2「何か言おうとするが」

女1「（それを制して）明大じゃなかったら、早稲田か、青学かしらナンテ言うんじゃないでしょうね。

女2「へへへへへへ。

女1「へへへじゃないわよ。

女2「ねえ、あなた、命題と、公理と、公準と、定理と、定義と、原理と、それぞれの違い分かる？

女1「国語のお勉強の次は数学と哲学やるわけ？

女2「だから、それによると、『もろびとこぞりて』はどれに当てはまるのかを考えればいいんじゃないかなって。

女1「何だか胃が痛くなりそう。

女2「命題はいいのよ、簡単だから。

女1「簡単なの？

女2「だって、適当なこと言っていればいいんだもの。〔空を飛んでいるものはすべて鳥である〕とかさ。

女1「ふーん。

女2「面倒なのは、公理ね。これって、証明の必要のない真理っていう意味と、単なる仮定っていう意味とがああなのよ。

女1「（暫し、無言で力んでいるが）離れましょ。

女2「え？

女1「だから『もろびとこぞりて』というタイトルから、離れましょっていつてんのよ。

女2「なんで？」

女1「私、疲れたの。」

女2「でも、そういうこと、許されるのかしら。」

女1「だって、

女2「タイトルつて、テーマがこめられてるんじゃないの？」

女1「そんなこと、承知してるわよ。だけど、

女2「だけど？」

女1「分かんないんだから、もういいじゃない。」

女2「じゃあ、どうするの？」

女1「今後、その件に関しては、触れずに進みましょう。」

女2「あなたがそのつもりなら、私もそれでいいわ。」

女1「それについては、聞かないことにしましょう。たとえば、彼がここに来ててもよ。」

女2「タイトルの意味を知らずに、やり続けるのね。」

女1「そう。」

女2「テーマを知らないで、やつちまうのね。」

女1「そう。」

女2「分かったわ。」

女1「意外にあっさりとしてんのね。」

女2「そう。蛤よりもシジミよりもあさりの音便変化であっさりよ。」

女2「どうする、ここ、出ちゃおうか。」

では、これは何かというと、ミステリー劇なのである。

女1「待ちましよう、彼を。」

女2「あなたも、意外と簡単に決断するのね。」

女1「これは覚悟よ。」

女2「覚悟？」

女1「そう。待とうと決めたつてことは、待とうと、覚悟したのよ。〔覚悟に勝る決断なし〕よ。」

女2「それ、誰かのコトバ？」

女1「ノムダスよ。」

女2「え、あの1999年七の月、の、予言者の？」

女1「ノストラダムスでしょそれ。」

女2「あれ、あたるのかしら。」

女1「あなた、信じてんの？」

女2「半分くらい。だって、ちょうど、世紀末の1999年なわけでしょ。二十世紀の終わりの年っていうのが、如何にも、

女1「如何にもウソ臭いと思わない？」

女2「え？・・・そう言われると、

女1「それにあなた、1999年で二十世紀最後の年じゃないわよ。」

女2「え、どうして？」

女1「だって、二十世紀最後の年は西暦2000年よ。」

女2「西暦2000年はもう二十一世紀じゃないの？」

女1「何、言ってるのよ。西暦は100年単位で1世紀でしょ。だから西暦1年から西暦100年までが、1世紀なわけじゃない。そしたら、1901年から2000年までが二十世紀なのはアタリマエじゃない。」

女2「あつそうか。」

女1「まあ、いいか。あなたみたいな人って意外と多いから。」

女2「で、ノストラダムスが、どう言ったの？」

女2「違うわよ、ノムダスよ。ノムダスはヤクルトの野村監督のこと。野村監督が書いた『勝者の資格』って本にこそあったの。〔覚悟に勝る決断なし〕って。」

女2「へーえ。あなた、野球も見るの。」

女1「野球はあまり見ないけど、ヤクルトの野村監督なら知ってるわよ。あなたの、その、思考法のなんたらとかいう本より役にたつわ。監督はその本の中でこうも言ってるの。〔私はコトバが欲しかった〕・・・分かる？あの日本一の野球の監督が、そう言ったのよ。あの情報と合理主義野球の監督が、〔私はコトバが欲しかった〕と、そう告白しているのよ。私、なんだか、感動したわ。」

女2「それはステキなことね。」

女1「あなた、どうする？」

女2「じゃあ、私も待つわ。」

やや間があつて

女2「で、何すればいいんだつけ？」

女1「だから、待てばいいのよ。」

女2「そうよね。」

女1「そうよ。彼を、彼が来るのを覚悟をもって、私たちは待てばいいのよ。」

女2「うん。うん、それは分かるんだけど。」

女1「何よ。」

女2「確認なんだけど。」

女1「確認？」

女2「理由はハッキリしてるわよね。」

女1「理由って、ああ、理由ね。彼と会う理由ね。」

女2「そうよ。それも分からないんだったら、まったくもう解決のないミステリーになつてしまうでしょ。」

女1「理由は、あれでしょ。」

女2「あれよね。」

女1「(さほど興味のないフリをして) 次のレパートリーの主役に誰を決めるかって、それでしょ。」

女2「そう、そうよね。」

女1「あなたと、私と、どっちかなんてしょ。」

女2「(やつぱり、さほどの興味はないという体をくずさず) ええ、そう聞いた。」

女1「(テーブルの台本を持ち上げて) これでしょ。」

女2「そう、これ。」

女1「私、とっても、これの主役やりたいんだけど、あな(たもそうでしょ)」

女2「(すかさず、先程の様子とはうって変わった決意をこめて) 私もよ。・・・チャンスよね。」

女1「そうよ。だって、こんなチャンス、生涯に一度か二度よ。」

女2「私もそう思うわ。」

女1「その相談ってことが、理由なら、彼は主役を誰にするか、決めかねているってことよね。」

女2「だと思う。」

女1「(台本をパラパラとみながら) 私、・・・やりたいなあ。」

女2「私はね、」

女1「ゆつとくけど、下積みだったのは、私だって同じなんですからね。」

女2 「それだけじゃないわよ。

女1 「いえ、そうよ。私のほうがうんと、ずっと下積みよ。あなた一度主役やったじゃないの。

女2 『私はヌレル』のこと？

女1 「そうよ。

女2 「でも、あれは、誰が主役なのか、ハッキリしない芝居だったもの。

女1 「でも、一応は、重要な役だったじゃない。私なんか、着ぐるみで、それも、ただのそれじゃなくて、お相撲さんの着ぐるみで、女相撲取りの役までやったのよ。

女2 「ええ、それは知ってるわ。

女1 「しかも、しかもよ。途中でフンドシが落ちて、オチンチンが見えるってオチまでついてたのよ。

女2 「あれはフンドシじゃなくて、マワシよ。

女1 「一緒よ、そんなの。あのね、私、いままであなたには黙ってたけど、あの役のおかげで円形脱毛症になったのよ。

女2 「禿げたの？

女1 「そうよ。後頭部にこおんな丸いハゲよ。

女2 「でも、でも、そんなこというなら、私なんか、稽古場で泣いたのよ。芝居が下手だって言われて泣いたのよ。

女1 「そんなこと誰だってあるじゃない。

女2 「でも、たいてい泣くのはトイレでしょ。

女1 「トイレ？

女2 「そうよ。でも、私はみんなの見ている前で、

女1 「何でトイレなの。

女2 「だって、そういうのって、ドラマチックでしょ。稽古場では平気な笑みを見せてお

いて、静かにそつとトイレに立つて、ドアを閉じて号泣するの。ほら、マンガにあつたでしょ。演劇のマンガに。

女1「演劇のマンガって、何とかの仮面とかいうやつ？」

女2「あれは演劇のマンガじゃなくて、マンガの演劇でしょ。」

女1「ああ、あの潜水艦のマンガ描いてる、あの作家の、あれ。」

女2「そう、あれで、あつたのよ。トイレで号泣つてのが。」

女1「で、そのドラマチックがどうしたって？」

女2「あなたは、お相撲さんでオチンチンでしょ。私は、」

女1「ちよつと、待つてよ。あのね、フンドシ姿とトイレで泣くのと、どっちがドラマチックかってことを、比べっこしてるんじゃないのよ。」

女2「フンドシじゃなくて、マワシでしょ。」

女1「どっちでもいいけど、あのね、論点を勘違いしないでね。私は、どっちがどれだけ下積みで、どれだけ不遇で、どれだけ苦労して、それで、この役が、どれだけ、どっちにとつて大切かってことを話してるの。」

女2「それは、私にとつても大事なことよ。」

女1「私にだつてそうよ。」

女2「でも、主役はひとりよ。」

女1「そうよ。だから、その相談をするために、ここにいるんじゃない。」

女2「でも、相談じゃなくて、もう決定しているのかも知れないじゃない。彼はそれを伝えるだけかも知れないわ。」

女1「じゃあ、何で、ふたりも呼ぶのよ。どっちかひとりで充分じゃない。」

女2「あなた、ほんとに呼ばれたの？」

女1「言うわね。その件について話があるって彼から聞いたわよ。」

女2「私もそうよ。」

女1「でも、あなたは駄目だわ。

女2「なんで、断言できるの。

女1「だって、だって、

女2「何で？

女1「それは、

女2「何か、裏工作したの？でも、彼には色仕掛けは効かないでしょ、ホモなんですよ。女に興味ないって聞いたわよ。買収だって無理だし。彼、お金あるもの。

女1「そんなことするもんですか。そんなことしないけど、彼ってホモじゃないわよ。

女2「え、そうなの。

女1「だって、女にモテナイ話をさつきしたじゃない。

女2「だから、男に走ったんじゃないの。

女1「たしかに、女性に対してよりも、男性に対しては、無防備にやさしいところあるみたいけど。それで、嫉妬する人も多いらしいけど。

女2「でしょ。

女1「でも、だからといってホモじゃないわよ。強いていうなら、ちょっと古いタイプの人種なのよね。

女2「古いタイプって？

女1「高倉健さんのヤクザ映画観て、泣くタイプよ。

女2「ふーん。そんな人っているんだ。

女1「ちよいちよい、そんなことは、どうでもいいのよ。あなたと話していると、話題が木の枝みたいにな、いえ、ジャガイモみたいに、リZoom化してしまつて、収拾つかなくなるんだから。

女2「何？リZoom化って。

女1「ほら、まさにそれよ。ひょいと出た言葉がツルになつて、お芋がひとつ出来るくら

いにふくらむつてこと。でもね、私が言いたいののは、この本の主役の話よ。

女2「(暫し、女1を見つめていたが) どうして、私にはこの本の主役が無理なの？」

女1「それは、あなたには、この本の主役が出来ないからよ。」

女2「だから、それって、どういうことよ。」

女1「あなたに出来ないのなら、私が主役になるのは決まってるじゃない。」

女2「どうして、私にこの本の主役が出来ないって言い切れるの？それって、女優としての実力をいってるの？」

女1「そうじゃないわ。」

女2「じゃあ、何よ。」

女1「(奇妙なことに微笑む)」

女2「どうしたのよ。」

女1「あなた、変だと思わなかった？」

女2「変？」

女1「それ(と、紅茶を指差す)」

女2「紅茶が何よ。」

女1「紅茶の味よ。」

女2「味？」

女1「変だと思わなかった？」

女2「少し苦いと思っただけ。」

女1「あなた、パプア・ニューギニアの呪術って知ってる？」

女2「呪術？パプア・ニューギニア？何の話？」

女1「パプア・ニューギニアには秘密の宗教があつて、その呪術師が、呪いで人を殺すのよ。でもね、最近になってそれは呪いではなくて、ある薬草を使っていることが判明したの。毒薬だったの。」

女2「(紅茶を見て)入れたの？」

女1「苦かったでしょ。」

女2「でも、そんなことをしたら、疑われるのはあなたよ。あなたは殺人犯として監獄行きじゃない。主役もナニもあつたもんじゃないじゃない。」

女1「馬鹿ねえ、どうして、私がパプア・ニューギニアの呪術のことを言ったのか分かってないのね。」

女2「な、何なのよ。」

女1「いいこと、パプア・ニューギニアの呪術というのはね、誰にも分からないようにして、あたかも呪いで、その人が死んだようにみせかけて、殺すのよ。証拠が残らないのよ。薬が効くまでに一週間程かかって、死んだ頃には、毒は排泄されてしまっているのよ。だから呪いで死んだんだとみんな、そう信じてたのよ。」

女2「そんなことが出来るの？」

女1「呪術は小説よりも奇なりよ。へっへっへっ、洒落言ってやった。」

女2「ほんとに、入れたの？」

女1「それだけは、洒落じゃないわ。」

女2「いったいイツの間に。」

女1「あなたが、台本に眼を通しているスキによ。」

女2「そんなスキ、あつたかしら。」

女1「スキって案外、気づかないものなのよ。だからスキっていうのよ。」

女2「たしかに気づかなかったわ。変な味だとは思ったけど。」

女1「もつと前に気づくべきだったわね。あなた、私に誘われて、ここに来たのよ。次の舞台の件で彼が私とあなたに話があるらしいって、誘ったら、ついて来たでしょ。」

女2「そうか、やつぱりそうだったんだ。彼は来ないのね。」

女1「そう。彼は別のところで待ってるの。(時計をポケットから出す)そろそろ行かなくつ

ちゃ。あなたは用事で来れないってことにしておくわね。もつとも、あなた、永久に、あと一週間もすれば、永久に、来れなくなるんだだけだね。ほほほほ。

女2「果たして、そうかしら。(微笑む)」

女1「何？その顔は。」

女2「気づかないものかしらって、いつてる微笑みよ。」

女1「どういうこと。」

女2「案外、気づかないものなのよって言ったわね。」

女1「ええ。」

女2「それは認めるわ。だって、あなたも気づかなかったもの。」

女1「何を。」

女2「私が、ティー・カップをすり替えたことをよ。」

女1「イツの間に。」

女2「気づかなかったでしょ。そうよ。人って、あなたの言うとおり、案外、気づかないものなのよねえ。(挑発的な嫌な笑顔)」

女1「どうして、すり替えたの？」

女2「見てたの。あなたが、私の紅茶に何か入れるところを。それから、もうひとつ、事実を言っただけでしょう。」

女1「事実って？」

女2「彼と会う約束の場所がここでないことは、私、知ってたのよ。実は、私も彼から電話をもらったのよ。(バッグから、携帯電話を出す)なのに、あなた、ここに私を誘ったわよね。その辺りから用心はしていたの。それで、わざとスキをつくったの。あなたが、紅茶に何か入れたことに、気づかないフリをしてみせたのよ。」

女1「そうだったの。」

女2「迂闊だったわねえ。あなたのいうパプア・ニューギニアの呪いの毒薬が、どんなふ

うに効くのか、私も経験してみたけど、残念だわ。でも、あなたの死に方を
て、今後の演技の参考にさせてもらうわ。

女1「それは、出来ないわ。」

女2「何で？」

女1「死ぬのは、あなただからよ。」

女2「(女1の科白をブラフだと判じて)へーえ。」

女1「あなた、紅茶が苦かったって言ったでしょ。」

女2「ええ。」

女1「この店の紅茶は、少し他の店のより濃くて苦いの。ところで、私の使った毒薬は、
甘い味がするって文献にあったわ。だから、あなたが、苦いって言った時に、ひよっ
としてすり替えられたかなと、私、感ずいたのよ。だから、良かったって思った。何
が良かったかというね、そういうこともあるかなって思っ、私は自分の紅茶を飲
まなかったの。それからね、そういうことも予想した上で、あなたに毒を浴びせてお
いたの。パプア・ニューギニアの呪術師が使う毒というのは、飲ませる場合もあるけ
ど、主には、聖なる水をふりかけるようにして、相手にふりかけるか、肌に塗り込め
るかするだけで、効果があるのよ。つまり、粘膜からも、皮膚からも浸透するの。」

女2「それで、あなた、私にコップの水をかけたの？」

女1「そうよ。毒はコップの水にも入れておいたの。顔は皮膚だし、眼に入ったのなら、
粘膜浸透するわ、きつと。」

女2「用意周到ね。」

女1「生涯のチャンスを逃さないためによ。」

しばし、二人、見つめ、いや睨み、あっているが。

女1「嘘よ。」

女2「そう。」

女1「嘘なんでしょ。」

女2「ええ、私も嘘。」

女1「そうよね。」

ミステリー劇でもなさそうだが、とすると、これは何の劇なんだろう。

女1「(紅茶をすする) 冷めちゃったけど、ふつうの味だわ。」

女2「(同様に飲む) うん。」

女1「私、あなたのいうように、ヒスなのかしら。」

女2「あれは、冗談よ。」

女1「そじゃないのよ。ときどき、自分が狂ってるんじゃないだろうかなんて、思う時、あるのよ。」

女2「あら、そんなの私、しょっちゅう。」

女1「彼はジャック・ニコルソンが嫌いなんだって。」

女2「あらそう。誰が好きなの。」

女1「マイケル・ケイン。」

女2「女優では？」

女1「ブリジット・リン。」

女2「へーえ、そうなの。」

女1「あなた、そういうことも知らないで、よく、彼の芝居の主演やりたいなんて、いえるわね。」

女2「あら、でも、彼の尊敬している映画監督なら、言えるわよ。あなた、知ってる？」

女1「え。・・誰だったっけなあ、ちよつと忘れしたなあ。

女2「何よ、スカして。川島雄三よ。

女1「ああ、そうそう。

女2「何が、ああそうそうよ。どんな監督か知ってるの。

女1「えーと、

女2「『幕末太陽伝』『貸間あり』それから、

女1「もういいわよ。

女2「そう。

ややあつて。

女1「でも、分かつてもらえたかしら。私の決意のほど。あなたを殺してだつて、次の主

役を手に入れたという、私の決意。

女2「それで、私に、辞退しろつて、言うの？

女1「ええ、きつともうすぐ、彼はここに来るわ。ほんとうの待ち合わせの場所はここよ。

それは、あなたも知ってるでしょ。

女2「もちろん。

女1「ねえ、お願いするわ。今度だけ、この役、私にやらせて。

女2「私だつて、もう三十の半ばよ。こんなチャンス滅多にないことよ。

女1「何だつてあなたの言うこと、聞くから。人參だつて食べるようにするから。

女2「ピーマンも？

女1「ええ。

女2「・・・よほどの決意ね。

女1「そうよ。『覚悟に勝る決断なし』これは、私の覚悟なの。

と、携帯電話のベルが鳴る。が、テーブルの上のものではない。

女2「私んじゃないわ。

別のテーブルにいる客のものらしい。
次々と、あちこちで携帯電話が鳴る。

女1「これって、どういうことなのかしら。

女2「携帯電話って普及してるのねえ。

女1「そんなことに驚いてるんじゃないわよ。客を見てよ。

女2「え？

女1「いままで、気がつかなかったけど、ほら。

女2「(店内の客を順繰り見て) みんな女性ね。

女1「しかも、私たちと同じよ。二人連ればかりよ。

女2「偶然ね。

女1「かしら。

女2の携帯電話が鳴る。

女2「あら、私のところにも電話。

女1「対称性の破れっていうやつかしら。

女2「何、それ(と言いつつ電話をとる)

女1「彼がよく使う手法よ。

女2 「もしもし、私ですけど。

女1 「ずっと、1体1の均一なシチュエーションを続けておいて、こういう電話で、その状況設定を破るのよ。

女2 「その彼からよ。もしもし、はい、二人ともここにおりますが。(女1を見る)

女1 「彼は来るの？来ないの？

女2 「(女1を制して) え、はい。(と言いつつ台本のページを繰る) 42ページですね。ここに移るんですね。ちよつと待つて下さい。(女1に) 42ページに移れつて。

女1 「(台本を繰る) 42ページね。

女2 「はい、分かります。ここから、演ればいいんですか。分かりました。あの、それで、いつこちらへ、(電話は切れたらしい。不服そうに電話を見て) 切れた。

女1 「(台本を手にして) ねえ、ほんとうに42ページつて言つた？

女2 「そう。42ページよ。

女1 「それ、変よ。

女2 「変て？

女1 「だつて、ほらここ読んでみてよ。(台本を女2に見せる)

女2 「あら。(自分の台本を確認するが)

女1 「ね。

女2 「どうなるのかしら。(不安そうに女1を見る)

女1 「(しばし、考えるが) あなた、チラシ持つてる？

女2 「この芝居のチラシ？

女1 「そう。

女2 「ええ。(と、バッグの中からチラシを取り出す)

女1 「(チラシを見ながら) 登場人物は二人のはずでしょ。私とあなたの名前以外、出演者の名前なんかないじゃない。他、とも記されてないし。

女2「だって、二人芝居なんですよ、これ。」

女1「じゃあ、どうするのよ。42ページからって、(今度は台本も持って)ここからだ、登場人物がもう一人、増えるのよ。」

女2「(店内の客をふと見ると)ねえ、見て。」

女1「え？」

女2「みんな慌ててるみたい。」

女1「私たちと同じよ。どう対処していいのか、迷ってるのよ。」

女2「第3の登場人物って、誰か、来てくれるのかしら。他の役者さん。」

女1「そんなこと聞いてないわ。」

女2「じゃあ、どうするの。どうすればいいの。だって、二人芝居なのに、三人めの登場人物が出てくるなんて、いったいどういふふうに解釈すればいいの。私、頭が混乱しちゃいそう。」

女1「へーえ、あなたでも、頭が混乱することあるの。」

女2「失礼ね。」

女1「とりあえず、42ページの冒頭は、溶暗ね。で、明るくなると、そこに、三人めの登場人物が立つてるわけですよ。」

女2「立っているとは書いてないわ。〔立ち上がる〕よ。」

女1「何れにせよ、立っているんですよ。」

女2「立っているなら〔立っている〕と書かれてるはずよ。でも、ここには〔立ち上がる〕と書いてあるわ。」

女1「じゃあ、(辺りを見て)・・・何処に座ってんのよ。」

女2「(他の客たちを見て)ほら、あそこも、あそこも、みんな捜してる。二人芝居に立ち上がって登場する、第3の登場人物を捜してる。これって〔もろびとこざりて〕じゃない？」

女1「え？」

女2「みんなそろつてよ。」

暫し、そのようすを二人見ているが。

女1「ともかく、溶暗ね。フェイド・アウトするのね。」

女2「そう。困惑する女優二人を残して、舞台は溶暗。ト書きにはそうあるわ。」

困惑する女優二人を残して、舞台は溶暗。

やがて明るくなると、舞台は誰もいない。

どころか、もうテーブルすら無い。すべてかたづいてしまった舞台だ。

やがて、女1、2、旅行鞆を手に、旅支度のコスチュームでもどつて来る。

女1「次は何処だつて。」

女2「エジンバラよ。」

女1「そう、そういうのをウィットに飛んだユーモアっていうのよ。」

女2「チョイナ。」

女1「落差が激しいのねあなたは。」

女2「次はS県のO市、明後日、ノリウチよ。」

女1「うわあ、ノリウチかあ。・・・(と、少々芝居がかった口調になって) ああ、あと、

どれだけ旅をすればいいのかしら。

女2「予定表見れば分かるじゃない。」

女1「あなたって、詩情がないわね。」

女2「シジョウ？」

女1「私が「ああ、あと、どれだけ旅をすればいいのかしら」といったのは、今度の巡演と、女優としての人生の哀感を、同時に語ったのよ。」

女2「ああ、そう。そうね。」

女1「ジュリアン・デュビュエの『旅路の果て』は俳優の養老院の話だったでしょ。」

女2「はいはい。」

女1「悲しいけど、いい映画だったわね。」

女2「ええ、名画座で、ふたりで観たのよね。」

女1「泣いたもんね。」

女2「そう、オンオン泣いた。」

女1「ああいう映画、ないわねえ、最近は。」

女2「そんなことないわよ。あるのよ。目立たないだけよ。」

女1「そうよね、子供の玩具で喜んでいる大人の映画ばかりが、目立っちゃって、気づかないだけよね。」

女2「そう。」

女1「リアリズムの問題かなあ。」

女2「偉そうに。リアリズムって何か分かってんの？」

女1「え、・・・何だと思う？」

女2「しょうがないわね。また教養出しちゃいわよ。」

女1「出してよ。」

女2「ここにガラスのコップがあるとするでしょ。」

女1「ガラスのコップね。」

女2「そうよ。それが床に落ちる。どうなる？」

女1「割れるんじゃないの？」

女2「それって、リアリズムだと思う？」

女1「リアルでしょ、やっぱり、割れたほうが。」

女2「リアリズムは、割れないのよ。」

女1「割れないの。」

女2「そう、ガラスのコップが床に落ちて、何故、割れなかったかということ、誰にも納得がいくように、描くのが、私たちのリアリズムなの。」

女1「(笑う) この受け売り娘。」

女2「あら、ばれたか。」

女1「旅が終わるまでに、ほんとにエジンバラに行けるといいわね。」

女2「ええ。ロンドンでもパリでも、ニューヨークでもいいわ。そういうところの舞台に立ってみたいわ。」

女1「なってみれば分かる。」

女2「え？」

女1「ロンドンや、ニューヨークやエジンバラってあなたが言うのを聞いて、そんなに海外がいいのかねって、顔する人いるでしょ。でも、なってみれば分かるわよ、女優に。女優というのがおこがましかれば、役者にでもいいわ。箔がつけたいから、言ってるのじゃないのよね。」

女2「そうよ。ただ、そういう舞台に立ちたいという(言葉をさがす)・・・欲望よ。」

女1「欲望か。うん、欲望というのは、いいわね。ハッキリしていて。」

女2「欲望よ。私たちには、私たちなりの欲望があるんだから。ね。」

女1「(舞台を見回すように) 第3の登場人物、うまく「立ち上がって」くれたかしら。」

女2「(同様に、舞台の床を視線でなめて) さあ、どうだったかしら。」

女1「(何処か遠くに視線を投じて) あ、あのふたり、きつと失敗したのよ。」

女2「どれ。」

女1「(指差す) あそこ。ほら、顔を曇らせて、そそくさと足早に去っていく。」

女2「あ、あの組のふたりもそうよ。

女1「ほんと、帽子を目深に被って、恥ずかしそうに歩いている。

女2「ああやってたとえ負けたり敗れたりしても、次の舞台のある場所に、行かなくちゃならない。かくして旅路はつづく。

女1「彼女たちの舞台には、第3の登場人物は、ついに出現しなかったのね。

しばし、その去り行く、別のふたり組を眺めているが、

女2「(舞台の天を見て) あ、忘れ物だ。

女1「え？

女2「ほら、あれ、外すの忘れてる。

女1「どれ？

女2「あれ、雪カゴじゃない？

女1「私たちの芝居に雪なんか降った？

女2「あ、そうか、あれは、ひとつ前のお芝居よね。

女1「(しばし、雪カゴを見ているが) ちょっと、降らしてみない。どこかに綱もとがあるはずよ。

女2「いいの、せっかく掃除まですんだのに。

女1「いいわよ。そんなに降らせやしないから。(綱もとをさがす)

女2「(反対側にそれを見つけて) これじゃない。

女1「ちょっと、引いてみてよ。

女2「(引く) よいしょ、ヨイシヨ。

女1「降らないわよ。もつと、ほら。

女2「(やってみるが) 雪、入ってないんだ。

女1「そうか。残念ね。

女2「残念でした。（と、自然に眼がピン・ルームに向いたので）あら、センターに、誰がいる。

女1「え？

女2「ピン・ルーム。

女1「あ、スタッフの人、まだいるんだ。（手をふつてみる）

女2「おおい。（手をふる）私たちはもう行きますよお。

女1「あ、気がついたみたい。

女2「御世話になりました。またよろしく。

と、センター・ピンが、二人を抜く。

女1・2「まあ。

女1「サービスね。

女2「そういえば、今度の舞台、ピンがなかったものね。

女1「やっぱり、ピンで抜かれると、気持ちいいね。

女1ダンスを始める。

女1のダンスが終わった。

女2「ステキ、ステキ。（小さな拍手）

女1「おそまつさま。（と、センターにお辞儀）

ピンが今度は女2を打つ。

女1「ほら、リクエストよ。あなたも何かやりなさいよ。

女2「でも、私、踊れないし。

女1「ほら、何か。女優でしょ。

女2は、フランス語で、何か『ひとり語り』を試してみせる。

女2「(お辞儀する)」

女1「(拍手)」

女2「いやあねえ、よしてよ。

女1「ねえ、ついでだから、唄でも歌おうか。ものみな歌で終わるって、知ってる？

女2「じゃあ、『もろびとこぞりて』を歌って終わり？

女1「ふつうはね。でも、彼の芝居は違うのよ。

女2「それじゃあ、女性二部合唱でいきましょう。

女1「いいわよ。

滝 廉太郎の「花」を合唱する。

歌い終わって、二人、礼。

ピンが消える。

女1「さあ、行きましょう。

女2「あ、(と床を見て)

女1「え？

女2「バミット後のテープが、(と、床のテープをはがす)

女1「さあ、もうちょつとだ。ああ、欲望よ。新しき欲望よ。

女2 「新しき欲望の時代はすぐそこに。

女1・2 「チョイナ。

ふたり、笑いながら去りゆく。

音楽。『夢ん中』流れて、舞台はまだ明るい。

終演

五稿	四稿	初稿
1996.08.16	1996.01.15	1995.12.24

北村想